

西船場、新町1丁目の「スポーツカー関西」というクラシックカー修理販売業の倉庫兼工場跡に、平成14年、インテリアショップ「pour annick」が誘致された。

工場の建物構造を生かした洒落たショールーム店舗の出店は、新町界わいの「住」空間のクオリティを向上させるきっかけとなった。続いて、立売堀1丁目にも「日常生活を彩る店舗を」と生地の特専門店「FIQ」が誘致され、倉庫がファブリック専門店に変身した。

仕掛け人は、有限会社バックステージの河合義徳さん。古い物件に住まい関係の店舗を誘致してきたが、次はショップ単体だけでなく、エリア全体のプロモーションが必要だと模索していた。

一方、Webディレクター、有限会社エー・エム・アールの高橋隆一郎さんと近藤光央さんは、インターネットをあえて特定エリア内のコミュニケーションツールとして活用することを思案していた。

もう一人、住宅の建て主と建築家をコーディネートする「家づくり計画アドバイザー」の幸田真生子さんは、建て主に対し住宅設備メーカー各社の情報を中立的に発信する有効な手段の必要性を感じていた。これらの考えが出会い、「この町独自の活性化」をめざす「地域連動型住まいづくり情報発信Web構想」が立ち上がった。

「この街を“住まい・素材の市場”として広く認識してもらいたい」という思いから「su-mart(スマート)」というネーミングに。地元貸しビル会社とフリーライター

も運営に加わって、5者全員が共同代表者となり「su-mart 合同会社」を設立。Web上の発信をベースにイベント企画や運営、家づくりサポート事業も行う。

四ツ橋筋や御堂筋の本町周辺には、住宅設備関連のショールームやインテリア店舗が40社以上も集まっているため、住まいづくりを検討する人にターゲットを絞り、本町界限に人を呼び込もうというもくろみだ。

「登録店は現在44店に。大切な情報発信パートナーです」と河合さん。7月から登録店との共催で、インテリアショップやショールームの数箇所、「自分に合った建築家の選び方」セミナーが毎月開催されることとなった。

西船場界限は今、他のエリアと差別化された住まいづくりのまちとして新たな展開をみせつつある。

su-mart URL

[www.su-mart.jp](http://www.su-mart.jp)

「待ってましたっ！」「いよっ！松嶋屋」「成田屋！」。大阪道頓堀にある松竹座の「七月歌舞伎」の前触れ行事である「船乗り込み」が今年も華々しく行われた。

6月28日の午後、七月公演に出演する片岡仁左衛門さん、片岡秀太郎さん、市川海老蔵さんをはじめとする役者や後援者を乗せた和船は、太鼓や笛の囃子（ルビ：はやし）を響かせながら、土佐堀川の淀屋橋から道頓堀川の戎橋まで約3キロを巡行した。

ビルの窓から手をふる社員、橋の上から紙ふぶきを投げる人など、この恒例行事を楽しみにしている地元民は少なくない。川岸や橋の上のファンに挨拶や口上が述べられると盛大な拍手が沸き起こった。

かつて江戸期を中心に道頓堀は日本最大の芝居街であり、「船乗り込み」は大正期まで盛大に行われていた。しかし、関西在住の役者が次々東京へ移り住むと同時に歌舞伎上演の機会が少なくなり、上方歌舞伎の灯が消えてしまいかねないほどになった。

そこで歌舞伎への気運を盛り返そうと、昭和五十三年十二月、現在の「関西歌舞伎を愛する会（以下、「愛する会」）」が結成される。当初は「関西で歌舞伎を育てる会」といい、大阪の民間労働組合（大阪民労協）を中心に、経済界や行政、文化人とともに、関西の歌舞伎界を応援し、ファンを増やす活動に踏み切ったのである。

昭和五十四年、「船乗り込み」が五十五年ぶりに復活、以降、大阪に夏の訪れを告げる風物詩となっ

ている。「愛する会」事務局長の川島靖男さんは、「今月の公演は、すべてが関西を舞台とした演目です。関西がお芝居ゆかりの宝庫だと感じていただけるはずです。歴史や文化にも思いをめぐらしていただければ幸いです。」

今日の「船乗り込み」は、東京の役者を呼び戻し「まれびと」として帰ってくるのを、水を介して迎え入れる儀式・祭礼として大きな意味をもつ。水都大阪における川の役割や可能性を再認識させる契機にもなっている。

松竹座は、今年新築開場10周年。正面アーチには創建の大正12年からの大阪の街文化が刻まれている。歴史を受け継ぎ、上方歌舞伎の発展を目指す“水辺の劇場”へ、この夏、ぜひ足を運びたい。

大阪を代表するビジネス街、淀屋橋。そのオフィス一辺倒な街を”大人がゆっくり楽しめる街”に変えて行く「淀屋橋WEST」プロジェクトが軌道に乗っている。

エリアは、御堂筋から西は西横堀あたり、北は土佐堀から南は平野町界限。炭火スペイン料理、ベルギービールレストラン、高級フレンチ、イタリアン、郷土料理などオフィスビル1階におしゃれな飲食店が増え、夜には暗かった通りがずいぶん明るくなった。

仕掛け人は(株)ケイオス代表の澤田充氏。ビルのオーナーから1階にテナント誘致を依頼されたのがきっかけである。「夕方には大勢の人がどーっと地下鉄駅に吸い込まれていく。女性だけでなく洗練された”おじさん”を対象に、落ち着いた大人客で賑わう街づくりができないかと考えました。」

ビジネス街も一筋入ると、信号がないため車はスローに。重厚な近代建築、寿司や和菓子の有名な老舗もある。歴史ある淀屋橋の土地性と風格のあるオフィスビル、そのステイタスやプライドと調和するのは、本格的な味とゆったり時間の流れる上質な店である。

銀行店舗や倉庫跡をコンバージョンし、通りから直

接入れるエントランスや、広いガラス張りの窓から街へ明かりや賑わいが漏れるような、環境演出にこだわった路面店へと変身させた。

2003年5月、澤田さんが誘致した3店舗の同時オープンでプロジェクトが本格スタート。年末には毎年、光のイルミネーションも開催している。現在10店舗まで増え、大阪倶楽部で演奏会を行う「日本テレマン協会」も加わった。コンサートとディナーのコラボレーションも実現。この7月には中華レストランが新たにお目見えする。

「理念だけではなく事実をこつこつと積み上げてプロセスを開示する“劇場的街づくり”です。お客様をはじめ、集まった人々によってできた空気感が、街のブランド化につながる。」  
「これは永遠に完成しない街づくりです」と澤田さんが語るように、ゆっくりだが確実に、街、店、人がつながり、淀屋橋の土壤ならではの文化が生まれ続けている。

「だんさん」「坊ん坊ん(ルビ:ぼんぼん)」「せんばことば」…。北浜、堺筋に面した三越跡工事現場。白い仮囲いに大きく黒いデザイン文字が浮かぶ。

これは「北船場くらぶ」が企画した“北船場ウォールアートプロジェクト”活動の一環である。無機質な工事現場の仮囲いをアートで飾り、新しい風景の1つとして街に彩りを添えたいという思いからはじまった。北浜で開発に関わる事業主11社が工事現場の仮囲いを提供、そこにアーティストが「船場言葉」をモチーフに描いた作品が2006年11月、お目見えした。現在も実施中だ。

北船場は、特に江戸期から日本経済の中心地でもあり、多くの人々が住み活気にあふれていた。現在はオフィス街としての機能が中心だが、一方で、店の特徴をとらえて自分流に使いこなす人、休日に犬と散歩する人も出てきたという。

新たな「くらし」の芽生えに着目し、地元有志により「北船場くらぶ」が2006年9月に立ち上がった。良質な資源をもつ北船場の「くらす」街としてのDNAを情報発信し、更なる魅力を創出することが目的だ。

まず、東京の出版社に自ら出向いてかけあい、ライフスタイル雑誌「北船場スタイル」を榎(えい)出版社とともに編集発刊した。まちの歩みや人、「場」の展開などを丁寧に取り上げ紹介している。他に、有識者やビルオーナー、デザイナーなどを招いたシンポジウムを開催、カリスマシェフによるイ

タリア料理講習会も好評を得た。大阪証券取引所ビルのアトリウムを活用した狂言の会にも協力、来月の7月8日に実施される。

事務局のケイオス、澤田充さんは「北船場に興味のある人なら誰でも無料で会員になれる。タイムリーに情報を得られ、イベントにも参加いただけます。できるだけ多くの方に入会いただき、北船場を味わってほしい」と話す。会員は、現在370名程度である。

顔の見える街として、コミュニケーション力をどのように育て広げていけるか。時間がかかるが一歩ずつ。熱い思いと手づくりの「場」が、人をつなぎ街への愛着心を育てる。ぜひ参加して、北船場の新たな側面を発掘したい。

「曾根崎心中のお初・徳兵衛の道行きは現在のどの場所になるのでしょうか」。映写するのは、元禄の古地図、屏風絵、現在の街…。二人が真夜中に露天神まで歩いたのは、今の駅前ビルやホテル間をぬうようなコースであった。

「なにわの語り部」活動をはじめたのは、この「曾根崎心中考」と題したスライド語りの公演からである。1994年のことだ。

たまたま上司の手引きで、古地図や資料を調べてみると、大阪の歩みやエピソードが「今」「ここ」とつながり、興味を覚えた。そこで、テーマを絞ったショートストーリーに仕立て、「語り」にあわせて映像や音楽効果を工夫したオリジナルの公演形式を生み出した。地域資源の魅力を楽しく理解できれば、地元の人がわがまちの価値を再認識し、大阪全体の元気の素にもなると考えたからである。

大阪は伝承力の弱いまちである。大正から昭和初期に旦那衆が本宅を阪神間や京都に移し、流入人口の増加とともに、商売に最大の価値を見出すようになった。そのため、地域の歴史や文化を語れる人が激減してしまった。

昨今、集客や観光によるまちの活性化が各自治体の課題に掲げられ、歴史や文化を活かしたまちづくりの気運が育ってきた。地域の物語を掘り起こしまちの魅力や可能性を伝える「語り部」活動は、地元民はもちろんビジターの心を満たす観光コンテンツとしても有効だと考えている。

近年、スライドをパソコンに代

え、講演としてひとりで話す場合も多いが、機会に恵まれれば、音楽家とのコラボレーションで、音楽的演劇的要素をふんだんに盛り込んだ作品として披露している。

私が制作した台本をもとに、ピアニストの宮川真由美さん、ヴァイオリニストで俳優の西村恵一さんと、音楽や演出プランを練る。お二人は多彩なレパートリーと表現力で、洒落た提案をしてくださる。出会えたことを本当に幸せに思う。

同じ作品でも再演のたびに台本や映像を更新し、その都度音楽効果も変えるため、本番で、語りとのタイミングがぴたりと合った時は何とも心地よい。

現在は、「曾根崎心中考」「大阪モダニズム物語」「水都大阪、中之島物語」「夫婦善哉考」の4作品。今後さらに進化させつつ、新作づくりにも取り組んでいきたい。

高級クラブやバー、料亭などが軒を連ねる北新地。パブル崩壊後、閉店する老舗も相次ぎ、近年は気楽なレストランやキャバクラなども増えている。

北新地は賑わいの街として長い歴史を持つ。元禄元年(1688)、堂島新地として茶屋、風呂屋、芝居小屋が許可されたのを契機に栄えた。堂島が米相場の中心になった宝永5年(1708)、遊樂の地は、当時あった蜷川北岸の曾根崎新地へと移動。近松門左衛門の「曾根崎心中」「心中天の網島」等の舞台になるような情緒があった。大正から昭和にかけて、表町の両側にずらりと茶屋が並び、800人以上の芸妓がいた。遊所としての文化が育まれてきた街だ。

近年、昔ながらの風格や風情が失われる危機感に煽られた地元の店主やママたちは、「北新地社交料飲協会」を中心に「おもてなしの街」を守るため活動を進めてきた。

例えば、本通り美装化工事で、電線を地下に潜らせ、でこぼこ道を舗装することを申請。完成した平成15年には、北新地の300年の歴史や遺産を紹介する文化銘版「わが北新地」10数基を制作し、新地本通りに設置してお披露目した。そこには北新地を愛する文化人や地元企業の協力・協賛があった。平成16年「北新地おもてなしMAP」を完成。「銀座社交料飲協会」と姉妹提携も果たした。

北新地の中でも文化サロンの店「安寿庵」のママを35年勤め、北新地社交料飲協会の常務理事でもある沖弘子さんは「弊店のよう

な店は、やはり接待でも使って頂かないと立ち行かないのです」と切に話す。

経営はかなり厳しいという。大阪から東京や他府県へ移転する会社の続出、企業の不祥事も影響して客足が遠のいている。「本来コンペティターである他店のママ達とも協力しないと、街は元気にならない。5年前から年に1度、社交料飲協会加盟店が結集してボランティアでパーティーを開催し、収入を街づくりへ活用しています。」

貴重な遺産であり観光資源でもある北新地。普段は足を踏み入れにくい一般の人にも体験してもらう「観光モニターツアー」が、行政のプロジェクトで計画され、大阪の活性化へつなげる動きもある。

街独自の品格と“おもてなし文化”を守り育てるためには、新たな戦略が必要とされる時代である。

島之内「たに川」は、大阪ミナミに唯一残る「お茶屋」である。

島之内というのは、江戸の初期に整備された、道頓堀川、長堀川（現在の長堀通り）、東横堀川、西横堀川（現在は阪神高速が走る）の4つの堀川に囲まれた地域をいう。道頓堀の芝居小屋、難波新地の色里に近く、役者や芸妓などが住まう粋なまちであった。

大阪で花街がもっとも栄えた昭和10年代には、宗右衛門町を中心にミナミ界隈でお茶屋が500～600軒あり、芸妓が2000人位いたそうだ。

震災後の復興が容易ではなく、お茶屋は激減した。戦前から続く有名な大茶屋の「大和屋」が2003年に休業してから、ミナミに残るお茶屋は一軒だけになった。

お茶屋というと、抹茶や茶葉を扱う店と思う人も多いが、正確には、座敷を貸してお客様をもてなす商売である。「たに川」の若旦那、谷川恵さんはこう話す。「大阪の伝統であるお茶屋をまず知ってほしい。一見さんをお断りするのは、気心が知れたお客様と信用を分かちあいながら、充分なおもてなしをするためです」。芸妓を呼ばなくてもいいし、うどんだけを食べに来る馴染み客もいるという。

畳や着物に慣れない若い人にも花街文化を紹介したいと、イベントを提案したり、04年からブログ「上方の宵 若旦那のお座敷入門」を始めたりと、発信に余念がない。ブログを見て、芸妓になりたいと若い女性からの相談が増え、現在は2人が見習い中である。

「たに川」は、恵さんの母親である恵美子さんが、昭和44年に立ち上げた。もと芸妓の恵美子さんは、華やかで優しい雰囲気のおかみさんである。恵さんは大学卒業後、堺市内で勤務中、体調を崩したのを契機に家を手伝い始め、跡を継ぐことに。「母には随分反対されましたが、お座敷の世界が好きなんです」と微笑む。

「年代性別問わず無邪気に遊べて、踊りや三味線など伝統芸能を間近で楽しめる。こういうお座敷文化が大阪から消えてしまうと、街としても魅力がなくなる。守りたいです」。

お茶屋独特の空間でもてなされ、芸妓さんと遊ぶことは、一般の人には憧れの異文化体験に違いない。一見さんの体験ツアーも試行されているが、いろいろな立場の人が享受できるよう、より工夫と協力が必要である。

「むかあしむかし、あるところに...」。絵本の読み聞かせではない。手には何ももたず、一人ひとりの瞳をのぞきこみながら語る。聞き手は自分に話しかけられたような気持ちで、ぐっとお話の世界へ引き込まれていく。

やさしい雰囲気にもまれる「たなかやすこのおはなし会」。主宰の田中康子さんが「おはなし」をするようになったのは約28年前、こんなきっかけだった。

田中さんは地域の子供文庫で子供たちに絵本を読み聞かせていた。ある日、関西弁で書かれた『ごろはちだいまようじん』を読み終えると、6歳のよし子ちゃんが「今度から絵本を全部覚えてきてーな」と頼んだ。田中さんはこのお話をすっかり覚えており、絵本を読むというより語りかけていたのだ。子供にとっては、寝床で母親に昔話をしてもらうような安らぎがあると気付いた田中さんは、以降、読み聞かせではなくお話を語るようになった。「子供だけでなく大人も、大きく瞳を見開いたり身を乗り出したり、聞き手の反応が手にとるようにわかって、私も楽しく元気になるんです」。

田中さんは、雑誌社主催のイベント出演を契機に、「おはなし」のプロとして活動を展開。生まれ故郷の空堀の長屋を活動拠点にしている。2001年6月から「おはなしさろん」として毎月1回自宅で勉強会を開始。年に1度、薬用年金会館で「おはなし会」を開催している。口こみでファンが増え、神戸や和歌山から通う人もいる。

現在も住まう空堀地域は、古い長屋や路地がめぐり銭湯も健在。昭和の住文化が残る貴重なエリアである。「ここでずっと話されてきた大阪弁で語りたい。その方が生きたお話になると思うんです。」

「空堀界限で生業を営み子を育て、一生懸命生きていた人々の物語を伝えたい。今語らないと、昔ながらの暮らしも人情も消えてしまう」と、田中さんは自らの体験を中心に『私の大阪』という作品を制作、発表している。

2月からは、作家の萩原遼さんと「おはなし道場」を開講。お話づくりと語りをみっちり教え、半年後には新たな語り手や作品が誕生する。

空堀の路地から広がる「おはなし」の世界。語り手、聞き手、いずれからでも、お話の不思議な力に出会う体験を楽しみたい。